

長崎県感染症発生動向調査速報

平成29年第25週 平成29年6月19日（月）～平成29年6月25日（日）

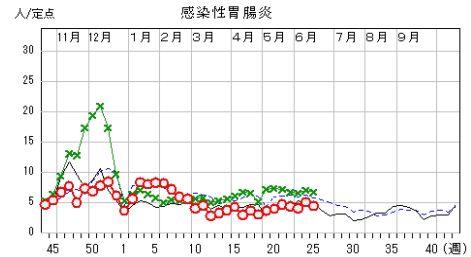
☆定点報告疾患（定点当たり報告数の上位3疾患）の発生状況

（1） 感染性胃腸炎

第25週の報告数は195人で、前週より28人少なく、定点当たりの報告数は4.43であった。

年齢別では、1歳（35人）、4歳（25人）、2歳（20人）の順に多かった。

定点当たり報告数が多い保健所は、長崎市保健所（6.40）、県央保健所（6.00）、佐世保市保健所（5.83）であった。

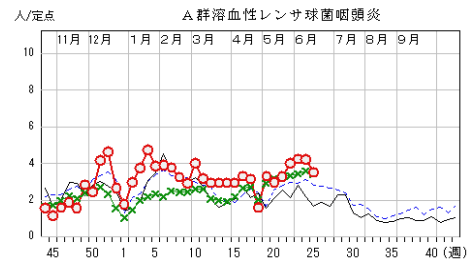


（2） A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

第25週の報告数は155人で、前週より31人少なく、定点当たりの報告数は3.52であった。

年齢別では、7歳（21人）、10～14歳（21人）、5歳（20人）の順に多かった。

定点当たり報告数が多い保健所は、県南保健所（8.60）、対馬保健所（7.50）、県央保健所（7.00）であった。

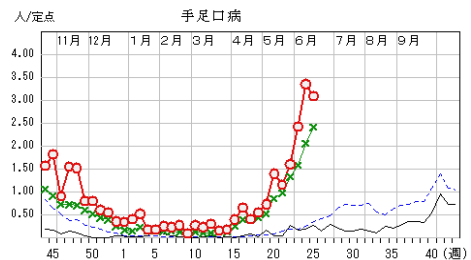


（3） 手足口病

第25週の報告数は136人で、前週より12人少なく、定点当たりの報告数は3.09であった。

年齢別では、1歳（70人）、2歳（29人）、1歳未満（15人）の順に多かった。

定点当たり報告数が多い保健所は、佐世保市保健所（8.67）、県央保健所（3.33）、長崎市保健所（3.30）が多かった。



○ 当年(長崎県) 前年(長崎県)
× 当年(全国) 前年(全国)

☆上位3疾患の概要

【感染性胃腸炎】

第25週の報告数は、前週より28人減少して195人となり、定点当たりの報告数は4.43でした。壱岐地区、対馬地区以外から報告があがっており、長崎地区（6.40）、県央地区（6.00）、佐世保地区（5.83）の定点当たり報告数は他の地区より多い状況ですので、今後の動向に注意が必要です。

本疾患は、細菌又はウイルスなどの病原微生物による嘔吐、下痢を主症状とする感染症です。年齢別に見ると、報告の多くを乳幼児が占めています。原因はノロウイルスをはじめとするカリシウイルスやロタウイルス、エンテロウイルス、アデノウイルスなどのウイルス感染による場合が主流ですが、腸管出血性大腸菌などの細菌が原因となる場合もあります。原因微生物のうち、ロタウイルスについてはすでにワクチンが認可されていますので、予防することが出来るウイルスです。特に乳幼児には、手洗いの励行とともに、体調管理に注意して感染防止に努め、早めに医療機関を受診させましょう。

【A群溶血性レンサ球菌咽頭炎】

第25週の報告数は、前週より31人減少して155人となり、定点当たりの報告数は3.52でした。五島地区以外から報告があがっており、特に県南地区（8.60）、対馬地区（7.50）、県央地区（7.00）の定点当たり報告数は他の地区より多い状況です。また、県南地区の定点当たりの報告数は、警報レベル開始基準値の「8」を超えておりますので今後の動向に注意が必要です。

本疾患の好発年齢は5歳から15歳で、鼻汁、唾液中のA群溶血性レンサ球菌を含む飛沫などによってヒトからヒトへ感染します。また、食品を介しての経口感染もあります。潜伏期間は約1日から4日で、突然の発熱（高熱）、咽頭痛、全身倦怠感、時に皮疹もあります。急性期患者の感染力は強いですが、適切な抗菌薬の投与により、多くは1日から2日後には症状も消失し、感染力も著しく低下します。不十分な治療は無症状保菌者を生じやすいため、早期に医療機関を受診するとともに、手洗いやうがいを励行し、感染防止に努めましょう。

【手足口病】

第25週の報告数は、前週より12人減少して136人となり、定点当たりの報告数は3.09でした。五島地区、対馬地区以外から報告があがっており、佐世保地区（8.67）、県央地区（3.33）、長崎地区（3.30）の定点当たり報告数は、他の地区より多い状況です。特に佐世保地区の定点当たりの報告数は、警報レベル開始基準値の「5」を超えておりますので今後の動向に注意が必要です。

手足口病は、例年5月頃から報告数が増加し、夏場にピークを迎えます。第20週には、佐賀県で流行発生警報が発表されました。本疾患は、口腔粘膜および四肢末端に現れる水疱性発疹を特徴とする乳幼児に多いウイルス性疾患です。感染経路は、糞口感染が主体で、飛沫感染や水疱内容液からも感染します。急性期に最もウイルスの排泄量が多く、回復後も2週間から4週間程度は、便中にウイルスが排泄されるため感染源となりえますので、保護者は乳幼児に手洗い、うがいを励行させて、感染防止に努め体調管理に気をつけてあげましょう。原因ウイルスの種類によっては手足口病とともに無菌性髄膜炎や脳炎を併発させることもありますので、保護者は早目に医療機関を受診させてあげるよう心掛けましょう。

★トピックス：マダニ類やツツガムシ類の活動が活発な季節です。ご注意ください！

マダニ類やツツガムシ類は、野外の藪や草むらに生息しているダニで、食品等に発生するコナダニや衣類、寝具に発生するヒョウダニなど、家庭内に生息するダニとは全く種類が異なります。野生動物が出没する環境に多く生息しているほか、民家の裏山、裏庭、畑やあぜ道などにも生息しています。

マダニ類は、日本紅斑熱や重症熱性血小板減少症候群（SFTS）などを媒介し、ツツガムシ類はその名のとおりツツガムシ病を媒介します。春から秋（3～11月）にかけては、マダニ等の活動が活発になる時期です。

野外で活動する際は、長袖、長ズボン、長靴を着用するなどして肌の露出を極力避けて感染防止に心がけましょう。もし、マダニ等に咬まれていたことに気づいた場合、無理に取り除こうとすると、マダニの口器が皮膚の中に残り化膿することがありますので、皮膚科等の医療機関で適切に処置してもらいましょう。また、咬まれた後に発熱等の症状があった場合は、速やかに医療機関を受診しましょう。受診した医療機関では、咬まれた状況などをできるだけ詳細に説明しましょう。

（参考）長崎県医療政策課 予防啓発リーフレット「ダニからうつる病気の予防」

<http://www.pref.nagasaki.jp/shared/uploads/2013/06/1372319143.pdf>

（参考）国立感染症研究所 昆虫医科学部ホームページ「マダニ対策、今できること」

<http://www.niid.go.jp/niid/images/ent/PDF/madanitaisaku20131105.pdf>



ヤマアラシチマダニ



フタトゲチマダニ



アカツツガムシ



吸血前

↑
1cm
↓

満腹状態

★トピックス：夏かぜに注意しましょう！

例年、夏場に流行する感染症として、手足口病やヘルパンギーナが挙げられます。5月頃から報告数が増加しはじめ、7月頃にピークを迎えます。発熱と水疱性発疹を主徴とするウイルス性感染症で、基本的に予後良好ですが、場合によっては髄膜炎や脳炎などの重篤な合併症を併発することもありますので、感染防止に努めてください。

現在、長崎県全体では、手足口病、ヘルパンギーナともに一部地域で患者数の増加が認められています。特に手足口病については、西日本において、すでに警報レベルに達している地域があることから今後の動向に注意が必要です。

主な原因であるエンテロウイルスは、せきやくしゃみを介した飛沫感染と、患者の便に汚染されたオムツや下着、器物からの接触感染（糞口感染）により広がっていきます。特に便からは1～4週間にわたりウイルスが検出されるため、回復後も感染源となり得ますので、オムツ交換や排便後の手洗いの徹底が必要です。主として乳幼児や小児に流行するため、保護者の方はお子さんの手洗いと体調管理に気をつけてあげましょう。

